



2017年6月28日放送

印象に残る症例②

みさとファミリークリニック 院長 松田 正

40歳代女性です。

当院では急性の激しい頭痛に対して、五苓散と呉茱萸湯の同時内服で治療をして10分間で効果がなければ脳神経外科に紹介する、という「漢方薬による10分間頭痛トリアージ法」を編み出し、昨年1年間にヨーロッパ頭痛学会をはじめ、日本頭痛学会、国際東洋医学会、日本東洋医学会、小児神経学会などで発表しています。

約85%の患者さんに効果があり、効果がなかった症例は、病院の脳神経外科ですぐに精密検査をしてもらうことで脳腫瘍、椎骨動脈解離、無菌性髄膜炎、副鼻腔炎などが早期発見できました。

片頭痛の漢方治療薬として五苓散と呉茱萸湯はとても有名です。が、どちらかを単独で使用方法が一般的で、有効率は50%程度です。効く人にはとても良く効くが、効かない人には全く効かないと言うことが多く、私は同時投与と言う方法を取っています。東洋医学的な診察を用いないことで賛否両論ありますが、誰にでも使用でき簡便であること、即効性があること、同時服用による相乗効果もあることから、とても有用性が高いと考えています。

今回ご提示する症例は、障害児をお持ちのお母さんで、お子さんの喘息治療に5年間、毎月きちんと当院に通院されて、お子さんの喘息を完治させることができました。症状が安定しているのに毎月ちゃんと通院するのは、お母さんがしっかりしていないとなかなか続かないものです。このお母さんは、見事にお子さんの喘息を完治に導いた立役者です。

お子さんが喘息治療を卒業して1年ほど経った頃でしょうか、診療受付終了時間を過ぎ、

最後の患者さんを拝見していた午後 8 時頃、ご主人に背負われて当院に飛び込んで来ました。ぐったりしていて、手足の力は完全に抜けて自分で身体を支えるのも困難で、すぐに処置室のベッドに運び横に寝かせました。

血圧や脈拍は正常、目は閉じたままで話しかけにも朦朧としていて要領を得ません。ご主人に聞くと、帰宅したらぐったりして倒れていて、お子さんに聞いても状況が良く分からないので、びっくりして連れてきたとのことでした。

まずは病歴が取れないとどうしようもないので、目を固く閉じたままのご本人にもう一度話しかけてみたところ、とにかく最初は頭痛がひどくて嘔吐し、その内に手足がしびれて意識が遠のいた、とささやくような小さな声で話してくれました。

手足のしびれと四肢の脱力は頭痛の辛さによる過呼吸によるものと思われましたが、問題は頭痛です。これだけの強い頭痛であれば、まずは頭部 CT 検査をして、脳出血やくも膜下出血がないかを調べるべきところですが、それにしては血圧が全く正常で、脳神経学的診察にも大きな異常所見が認められません。

まずは当院の頭痛トリアージ方法に準じて、五苓散と呉茱萸湯を一袋ずつ飲ませました。10 分後、少し頭痛が減って楽かも、と言うことで、もう一回、五苓散・呉茱萸湯を内服させました。それから 15 分後には頭痛は来院時の三分の一以下になり、ご本人も目を開いてしっかり話せるようになりました。なぜずっと目を固く閉じて会話もできなかったのか？その答えは、片頭痛の発作時には周囲がまぶしく見えてしまうために目を閉じた方が楽なのと、自分の声が頭に響いて頭痛が悪化するために、小声でしか話せなかったのだと思います。いずれも片頭痛の特徴で、漢方治療で症状が改善していることから、緊急の頭部 CT 検査はせず、この日は漢方薬を処方し歩いて帰宅となりました。

その翌日の問診でのお話が衝撃的で、示唆に富んでいるので、以下、その患者さんが私に話してくれた概要をお話します。

まず、患者さんは 20 年来の頭痛持ちで、時々頭痛の発作があったけれども、鎮痛薬などを飲むことなくずっと我慢をされていたそうです。今回、1 週間前にお子さんが B 型インフルエンザになって看病が大変だったこと、学校の役員の仕事で多忙だったことから、この 1 週間は強い頭痛が断続的にあったそうです。それでも頑張って家事をしている途中で、頭痛が今までになく悪化し嘔吐。その後呼吸が苦しくなり、手足がしびれて意識が遠のいてしまった、とのことでした。

私が一番驚いたのが、5 年間もお子さんの喘息で当院に通いながら、「なぜ頭痛の相談をしなかったの？」と尋ねると、「頭痛くらいで病院にかかって良いのですか？」と真顔で逆に質問されたことでした。

片頭痛は体動で頭痛が悪化するので動けなくなることが多く、不登校や出勤困難の原因になったり、時に怠け者扱いされることもあります。加えて強い頭痛発作だと 2~3 日寝込むこともしばしばあります。それだけ辛い頭痛にもかかわらず、自分を犠牲にして、家事、育児、仕事を優先し我慢をして耐えていたということに、なぜ家庭医の私が気付いてあげら

れなかったのか、深く反省させられたと同時に、頭痛を訴え医療機関に足を運ぶ患者さんは氷山の一角であるということに気付かされた瞬間でした。

その後の経過は、漢方治療で頭痛は消失し、今は西洋薬の片頭痛予防薬、ロメリジンを内服しながら、前兆があった時にだけ頓服で漢方を飲めば片頭痛発作が起きないのでとても楽と仰っています。元の元気なお母さんに戻って、私も心からホッとしています。

五苓散を予防薬として、片頭痛発作時に呉茱萸湯という使い方もあるのですが、私は発作が少ない患者さんには五苓散・呉茱萸湯の頓服使用、発作の多い患者さんにはロメリジンを予防投与しながら、発作時頓服で漢方治療としています。不思議な現象なのですが、五苓散・呉茱萸湯を頓服している患者さんの多くが、発作の回数が徐々に減少していることを報告してくれており、予防内服薬を中止できた患者さんもいます。漢方薬の頓服でも体質改善効果がある可能性を示唆しますが、この点はもう少し症例を積み重ねて検討したいと思っています。

五苓散・呉茱萸湯の同時投与は、片頭痛治療薬のスマトリプタン注射にも併用が可能です。スマトリプタンの薬効は 80%程度と言われていますが、注射後に残存した頭痛にも効果を発揮します。このように、漢方薬は単独でも片頭痛治療が可能ですし、西洋薬の補完治療の役割を担うことも出来ます。このことは、片頭痛の発症機序が複数あることを示唆していると考えられます。

当院では、最年少の片頭痛患者さんが 4 歳 10 か月の男児、5 歳代が 4~5 人、6 歳以上はかなりの数に上ります。当院でお子さんが片頭痛と診断され漢方治療し奏効するのを目の当たりにして、それまで市販薬で頭痛治療していたお母さん達もお子さんと一緒に漢方薬を希望されるようになりました。ご家族で片頭痛の治療をしているご一家がかなり増えて、最近ではそのご親戚までいらっしゃるようになったのはちょっと驚きです。日本における片頭痛の罹患者数は 840 万人と言われているようですが、かなり多いというのは間違いなさそうです。

昨年 9 月にスコットランドのグラスゴー市で開催されたヨーロッパ頭痛学会では、妊婦さんや授乳中の女性に対する片頭痛治療薬がないことが議論になっていました。漢方薬であれば、妊婦さん、授乳中の女性、透析の患者さんにも使用できますから、五苓散と呉茱萸湯が世界的な片頭痛のスタンダード治療になり得るポテンシャルがあると私は信じています。今年 9 月にカナダのバンクーバーで開催される国際頭痛学会では、片頭痛に対する急性治療のセッションで五苓散と呉茱萸湯の同時投与の発表をする予定です。

最後になりますが、当院のモットーは、「頭痛は鎮痛剤ではなく漢方薬で治そう。」です。鎮痛剤やトリプタンによる薬物乱用頭痛を防ぐ観点からも、体質改善を目指す五苓散と呉茱萸湯の同時投与は最適な頭痛治療であると私は考えています。